

「あ！萌え」の構造（11）

－「関係性萌え」としての「推し」－

総合心理学部 齋藤清二

近年急速に論じられるようになってきた「推し」現象であるが、第10回でも一部論じたように、「萌え」が情動をその中核とする「美的総合」に深く関連した体験であるとするならば、「推し」はより「主体と対象との相互関係」に関連した体験であると思われる。もちろん、「萌え」と「推し」は、密接に関連した現象であることは確実であり、「萌え」についてこれまで行ってきた考察は、「推し」に対してもかなりの部分適用することが可能であると思われる。以前に「萌え」には「キャラクター萌え」と「関係性萌え」と「ストーリー萌え」のような下位分類が可能ではないかと論じたが、本稿では、「関係性萌え」との関連から「推し」について論じてみたいと思う。

推しとファンの関係

ファンが「推し」に対してとる行動の典型は、アイドルなどのグループにおける特定のメンバーに対して強い魅惑を感じ（萌え感情を抱き）、その「推し」に対して何らかの利他的な行動（ライブに行く、課金をする、プレゼントをする、コンテストで投票する、など）を熱心に行うことである。このような行動を総称して「推し活動」と呼ぶことにしたい。「ファン」と「推し」の関係は、対等ではなく、「ファン」は「推し」に対して一般には個人的な見返りを求めない。「ファン」は「推し」に対してある意味無償の愛を捧げるのであり、何らかの見返りを求めることは、推し活動の本質にそぐわないと見なされるようである。ただし、推される側のアイドルなどは、推し活動を自分に捧げてくれるファンに対して何の義務もないかといえそうではなく、ファンを「分け隔てなく愛する」、あるいは「ファンと推しとの関係を暖かく受け容れる」ことが推しの側の義務であると思われる。

推しの側からみるファンとの関係は「個人的な関係」であってはならないようである。推しは原則として個々のファンの中に、差をつけてはならない。ただし例外もないわけではなく、推しが特定のファンを好むような行動をとる（あるいはそういう感情をもつ）場合、そのファンは、その推しにとっての「お気に入り＝オキニ」と呼ばれる。「推し」と「オキニ」の関係は、個人的な関係であるが、元来の推しに期待されている態度とはむしろ相容れず、それは同じ対象を推して

いる同士（推し被り）の中では逸脱行為とみなされる。推しにオキニがいることが露わになると、極端な場合、そのオキニは推し被り集団に属する他のメンバーからは、憎悪の対象にさえなる。そして最悪の場合、推しの対象であったアイドルは、「推し」としての存在そのものを失ってしまうことさえある。アイドルが結婚や特定の相手との交際を公開した時におこる、悲鳴にも似たファンの動揺や嘆きはこのようにして生じるのであろう。

ファンから見た「推しとの関係」

上記のように、典型的なファンは、推しを一方向的に崇拜し、推しに対して無償の愛を捧げ、奉仕する。ファンはあくまでも「集合的な愛」を形成する集団の一員であり、ファンが「私と推しとの個人的関係」を求めることは、いけないこととして抑制されている。このような集合的な関係はファンにとっては、見返りの少ない関係のように見えるが、実際にはファンはこのような関係を推しとの間に結ぶことによって、十分な見返り（報酬）を受け取っている。

この時にファンが推しから受け取る「報酬」は、「萌え」に伴って生じるポジティブな効果とほぼ共通しているだろう。それらは「快感」「苦痛抑制」「行動活性化」である。これらは、「没頭」という概念で表現することもできるだろう。ここで起こる「行動への好ましい影響」は、行動分析的に言えば「正の強化の随伴性」を布置することである。「正の強化」は、楽しいことをすればするほど楽しいことが増えるという、まさに人間を幸福にする随伴性なのである。

一方で、推し活動によって、生じる（可能性のある）害は、「依存」である。このことも「萌え」の場合とほぼ同様である。しかし、「依存」一般にいえることであるが、その人の生活や人生を破壊してしまうような「病的な依存」が生じる頻度はさほど多くない。もちろん直接の統計データがあるわけではないが、おそらく専門的な対策を講じなければならないような「病的な依存」に陥る人は、推し活動をしている人のたかだか数%を超えることはないだろう。むしろ多くのファンは、推し活動をすることを通じて、自身の人生をより豊かで安全なものにすることに貢献しているものと思われる。

それでは、推し活動が「役に立つ依存」になる場合と、「破壊的な依存」になる場合は何が違うのだろうか。行動分析理論から推定するならば、これは「強化行動の随伴性」が「正の強化」であるか「負の強化」であるかということに関係すると思われる。

推し活動の行動分析的解釈

正の強化とは、行動（例えば推しに課金すること、コンサートへ行くことなど）が、次の行動への先行刺激（これを正の強化子と呼ぶ）として現われ、その行動

の頻度が増加するような状況のことをいう。つまり楽しいから推し活動を行い、推し活動が楽しいために、さらに推し活動の頻度が増すというサイクルが成立していることである。

それに対して「負の強化」とは、行動によって、刺激が消失し、その結果として行動の頻度が増えるというパターンのサイクルが生じている場合である。これはちょっと分かりにくいのが、この場合、消失する刺激とは、「人生への虚しさ」とか「苦痛の感情」などであることが多い。つまり、負の強化の随伴性においては、行動が増えるのは、「楽しいから」ではなくて、「その行動をしている時だけ苦痛が消失する」からである。負の強化の随伴性が存在している時、人間は破壊的な依存に陥る可能性が高くなる。推し活動に没頭したり、萌え感情に没入している時には、一時的に「人生の苦しさ」が消失するので、負の強化の随伴性によってそれらの行動の頻度が増える。しかし、その行動をやめたとたん、「苦痛」や「苦悩」はすぐに戻ってくる。しかも「推し行動」や「萌え情動」以外には、その苦痛を軽減する手段をもっていない状況では、その人は、次第にエスカレートする「救済希求行動」を続けるしかなくなるのである。

負の強化が破壊的な依存になりやすいのに対して、正の強化ではなぜそのようなことが起こらないのだろうか。これについては完全に実証があるわけではないが、生物一般に認められる基本的な学習のパターンである「馴化」が関係していると思われる。簡単に言えば、私たちは楽しいことを繰り返すと、それに「慣れ」てしまい、最終的には「飽きて」しまうのである。この「馴化」の学習メカニズムは、「鋭敏化」と並んで、生物学的には非常に古いものであり、古典的条件付けやオペラント条件付けに先行する。残念ながら私たち人間は、永遠に続く快樂を手に入れることはできない。どのような快樂もいつかは「卒業」の時がくるのである。意味のある幸福な人生を過ごすためには、「卒業と再出発＝新たなる旅立ち」の繰り返しを受け入れるしかないのだろう。

推し活動への支援の在り方

実際に「推し活動」や「萌えの探求」のど真ん中にある人に対して、私たちはどのように関わるのがよいのだろうか。極めて単純化していえば、「その活動を純粋に楽しむことを承認し推奨すること」である。推しや萌えが害のある依存になってしまうのは、その人自身やその人に影響を与える周囲の人が、その活動を否定的に評価している場合である。これは本人にとっては「罪悪感」として感じられ、せっかくの活動を正の強化から負の強化へとシフトさせてしまう。つまり、活動に没頭している時だけ「罪悪感（という苦痛）から逃れられる」というパターンに陥ってしまうことになるのである。したがって、推し活動や萌え探求行動（この中には実に多様なものを含むが、要するに「いけないことだが楽しいこと」

である)を、禁止したり、罪悪感を増強させるような働きかけは、うまくいかないということである。楽しいことは純粹に楽しむべきであって、そのようにしていてもそれが無限にエスカレートすることはない。結局は「あるがまま」を受け容れることによって、それぞれが「あるべきように」収まっていくように、私たちは創られているのである。

推し活動における相互性と再帰性。

萌えは、一人でも楽しむことのできるものであるが、推し活動の多くはそうではない。推し活動は多くの場合集団で行われるし、推しは「布教」などの積極的な交流を推進するので、推し活動をするファンは、積極的に他者との交流を通じて自分の世界を拡げていくことになる。ファンから見ると、推しとの関係は、少なくとも出発点においては個人的なものである。しかし、推しからファンには個人的な関係は返報されない。そこで生じるのは、推しという共通項を通じてのファン同士の相互交流である。推し活動がもっているこの「相互関係の拡張機能」は、「萌えの探求活動」よりも強力である。特定の推し対象を共有する推し被りの集団は個々の構成員の主体性を保ちながら、イベントなどにおける没個人的な集合性の体験を供給するものであり、これは人類が古くから行ってきた、宗教活動などに非常に近いものである。

人間は一人では生きていけないとは、よく口にされる言葉ではあるが、現実には、人間は生まれるときは一人であり死んでいく時も一人である。この「個人性」は、現代の人間が健全に発展させなければならないものであり、それは社会・文化的な活動に表現されると同時にそれによって大きく影響されるものである。しかし、個人性の深い自覚は、同時に深い「孤独」や「寂しさ」をもたらすものであり、人間が個人として生きる（おおざっぱに言えば子供から大人になる）ためには、「寂しさに耐える強さと方略」が必要になる。確立された誇り高い個としての「私」が存在するために、推し活動において得られる、没我的集合的一体感の世界は強力な援助的時空間を提供する。「萌え」と「推し」に共通するこの機能は、人間が人間として存在することの力となる、とてもうまく設計された営みなのではないかと思われる。